

読谷村統計書

令和5年度版



読谷村章

昭和51年12月24日
制 定

「よ」と「み」をつなぎ村民の協力と羽形は村の飛躍発展を表し、外円は村民の融和、団結の形で、囲まれた空白はその豊かさと村勢の発展を象徴する。

沖縄県中頭郡読谷村

読谷村「村木・村花・花木・村魚」

改正 平成 12 年 4 月 18 日 告示第 25 号（村木・村花・花木）

公布 平成 29 年 7 月 14 日 告示第 98 号（村魚）



村木：フクギ

雄雌異株で高さ 20m くらいに達する常緑広葉樹。沖縄では古くから織物用の黄色の染料を採る材料（樹皮）として利用されるとともに、海岸、屋敷の防風林としてかかせない沖縄を代表する緑化樹である。

（2000 年 3 月制定）



村花：ブーゲンビレア

情熱・明るさ・繁栄の象徴をあらわしている。ブラジル原産のツル性花卉。日当たりがよく、水はけのよい土地を好み、栽培も挿し木で増やせる。一年を通して色どりの花を咲かせてくれる。

（1986 年 4 月制定）



花木：コガネノウゼン（イッペー）

高さ 30m ぐらいに達し、直立する落葉広葉樹。原産地はブラジルで、本県には 1974 年に導入された。鮮やかな黄色の花は南国的な雰囲気をかもし出す。

（2000 年 3 月制定）



村魚：ジンベエザメ

成長すると 10m～12m になる世界最大の魚類。本村の大型定置網で年間に数匹が捕獲され、都屋漁港沖にある大型生け簀で飼育されており、今ではジンベエザメを活用した観光プログラムが定着するなど、言わずと知れた本村の海洋資源のシンボリックな存在となっている。

（2017 年 7 月制定）

は し が き

ここに令和5年版「読谷村統計書」を刊行します。

本書は読谷村の基本目標である「ゆたさある風水 優る肝心 咲き誇る文化
ドゥ ウム イアワチ
ど 想い合ち」を実現するにあたり、地域の現状把握や将来展望を考える上で
重要な情報となる本村の人口・産業・経済・民生・教育及び文化等、各分野に
おける基本的な統計資料を収録するものです。これらのデータを活かし、村民
の皆様がより良い生活を送るための政策立案や施策の検討に役立ててまいります。

また、地域づくりを進める上で、この統計書を通じて、地域の課題や可能性
を村民の皆様と共有し、一層の連携と協力を深めていくことが重要です。皆様
と共に歩む地域社会の未来を見据え、より良い未来を築いていくために、この
統計書が一助となることを心より願っております。

なお、本書の編集にあたり、貴重な資料をご提供くださいました関係各位に
深く感謝申し上げますと共に、今後ともなお一層のご協力を賜りますようお願い
申し上げます。

令和6年3月

読谷村長

石嶺傳實

沿 革

1. 「おもろさうし」の「よんたんざ」

本村は、古くから中山国の最北端にあったことから「うぶにし」（大北）と呼ばれました。琉球の古謡集である「おもろさうし」には「よんたもざ」「よんたむざ」と記されています。

また地形が半島となって海に突き出ていることから「さきよた」（崎枝）とも呼ばれました。「よんたもざ」「よんたむざ」は後に「読谷山」と呼ばれ、恩納村の南半分を領有する中山国の北鎮でありました。

2. 貿易使節「宇座の泰期」

1372年、察度王は、泰期を王弟と称せしめ明（中国）に遣わしました。これが琉球から初の朝貢貿易です。

また、「おもろさうし」には、「ふるげものろのふし（古堅祝女のふし）」の「初の貿易船をたたえるおもろ（巻15ノ66）」と「帰還貿易使節歓迎のおもろ（巻15ノ68）」の中で、「おざのたちよもい（宇座の泰期思い）」と謡われ、明（中国）貿易をはじめた勇敢な人と讃えられています。泰期は、数度にわたって明（中国）との交易を行い、進んで文物を摂取し、琉球の進運に大きな影響を与えました。

3. 歌と三線の祖と称えられる「赤犬子」

第二尚氏王統、尚真王代にオモロ歌唱の名人とされるアカインコがいたといわれています。「おもろさうし」（巻八）「おもろねあがり、あかいんこがおもろ御さうし」の後半部約40首がアカインコの詠んだオモロとなっています。アカインコは本村楚辺の出身でその足跡は沖縄本島の中中部はもちろん北部・南部に及びその美声は各地で歓迎されました。

4. 「座喜味城」築城

1422年頃、読谷山の「按司」であった護佐丸は、尚巴志の命により座喜味城を築き、山田城から座喜味城に移って良港長浜を眼下に、およそ20年間読谷山一帯を統治しました。1440年頃、中山王府の命により護佐丸が中城城に移りました。

1447年に即位した尚真王の中央集権制度により、「按司」は首里に集められ、各間切には「按司掟」が置かれました。

5. 「喜名番所」設置

この按司掟は1611年に廃止され、各間切には「地頭代」が置かれるようになりまし
た。当時、読谷山間切は谷茶以南を含む25カ村でありましたが、1673年の恩納
間切の創設により、9カ村が恩納間切に編入され16カ村となりました。1820年頃、

首里から国頭方面への街道が喜名村ムラに開通し、座喜味城内にあった読谷山番所ハンジヨは喜名に移され、「喜名番所ハンジヨ」と呼ばれるようになりました。

6. 村ムラ（字アザ）の編成

1897（明治30）年の間切島吏員規程実施により、「地頭代」は「間切長」に変わり、番所ハンジヨが間切役場となりました。1899（明治32）年の沖縄県土地整理法の施行により、それまでの喜名・座喜味・伊良皆・上地・波平・高志保・渡慶次・儀間・宇座・瀬名波・長浜・楚辺・渡具知・比謝・大湾・古堅の16カ村ムラより、伊良皆から長田が、大湾から牧原が、喜名から親志がそれぞれ分離し、19カ村ムラになりました。

1908（明治41）年には島嶼町村制の施行により「間切」を「村ムラ」に、「村ムラ」を「字アザ」に改め、「読谷山村ヨミタンザソン」となりました。そして、1914（大正3）年には大湾から比謝ヒセが、1935（昭和10）年には楚辺と比謝から大木が、さらに1946（昭和21）年には座喜味から都屋アサが分離し22カ字アザとなりました。

7. 戦後「基地の村」

第2次世界大戦において、本村は米軍の上陸地点となり、砲撃は熾烈を極め、緑野は焦土と化しました。1946（昭和21）年8月、波平と高志保の一部に帰村が許可され、600人余の村民で編成した「読谷山村建設隊」が村の再建に着手し、同年11月に待望の第1次復帰が実現しました。

その後も楚辺・大木など逐次復帰が進み居住地域も拡大していき、同年12月16日、戦災で荒廃した人心の一新と村の復興を願って、村名を「読谷山村ヨミタンザソン」から「読谷村ヨミタンソン」に改称しました。しかし村土のほとんどは軍用地に接収されたままであり、1952（昭和27）年4月28日の対日講和条約の発効により沖縄の施政権は分離され、「基地の村」という戦後を歩むこととなりました。

8. 復帰後の「文化村づくり」

1972（昭和47）年、27年間続いたアメリカ施政が終わり、沖縄は日本に復帰しました。しかし、復帰運動時、県民の悲願であった「核も基地もない平和な沖縄」は実現せず、一部の軍用地は返還されましたが、大半は残されたままとなりました。

こうした中、新しい村づくりが開始されました。その目標に「人間性豊かな環境・文化村」をかかげ、諸事業と並行して自立心を育成する文化村づくりに取り組んできました。

この文化村づくりは読谷山花織ゆんだんざはなういの復興、陶芸の拠点としてのヤチムンの里建設をはじめとして、各字の郷土芸能やお年寄りから子供たちによる演目が一堂に集まる「読谷まつり」へと花開きました。

9. 21世紀に入ったむらづくり

21世紀へと時代が変わり、むらづくりの目標を琉歌の韻を踏んだ「しまくとうば」

で「ゆたさある風水 優る 肝心 咲き誇る文化や 村の指針」と改めて、これまで培ってきた文化村づくりを基に、21 世紀という新しい時代に向けた取り組みを開始しました。

この中で文化村づくりの成果である文化センターが開設され、また座喜味城跡が 2000（平成 12）年に世界遺産へ登録されました。さらに、村民の悲願であった読谷補助飛行場が 2006（平成 18）年、戦後 62 年目、復帰後 35 年目にして遂に全面返還され村民の手に戻り、その跡地利用が 21 世紀むらづくりの幕開けとなりました。

10. 自治と協働するむらづくり

21 世紀初頭では少子高齢化に伴う課題が顕著となり、標語を琉歌の末句を変え「ゆたさある風水 優る 肝心 咲き誇る文化や 健康の村」とし、健康を大切に、共に協働するむらづくりを目指しました。

返還された読谷補助飛行場跡地では、国道 58 号読谷道路をはじめとする幹線道路、陸上競技場、ファーマーズマーケット、地域振興センター等の施設、大規模な農業基盤の整備が進み、活力あるむらづくり拠点の形成が進みました。

1985（昭和 60）年に大添、2014（平成 26）年に横田自治会が発足し、合わせて自治会は 24 となりました。これまで自治会や各種団体と共に進めてきたむらづくりを踏まえ、むらづくりの最高規範とする「読谷村自治基本条例」を 2013（平成 25）年に制定しました。また、本村の人口は、なお増加傾向にあり、2014（平成 26）年 1 月 1 日には、「日本一人口の多い村」となり、そして新たに行政区域を定め、24 自治会とそれを包含した 19 の行政区域による新たなむらづくりがスタートしています。

11. いちゅいゆんたんざ

2018 年（平成 30 年）に策定した読谷村ゆたさむらビジョンでは、これまでのむらづくりの成果を集大成させ、地域社会の持続的発展を目指し、村民が一丸となり協働のむらづくりを進めるため、「ゆたさある風水 優る 肝心 咲き誇る文化ど 想い合ち」と掲げています。想い合ちのもと、「いちゅいゆんたんざ」の気概を持って、創造・協働・感動のむらづくりに取り組んでいます。

読谷補助飛行場跡地では、引き続き跡地利用に取り組み、村道中央残波線をはじめとする道路網や、ユンタンザパークゴルフ場、ゆんたんざソフトボール場が整備されてきました。また、文化振興の核となる施設としてユンタンザミュージアムが 2018 年（平成 30 年）に開館する等、村づくりが進められています

凡 例

- (1) 本書は原則として令和4年を中心に収録掲載し、あわせて過去の資料も比較対象のために揚げた。
- (2) 統計表中、特別の表示、注釈のない限り「読谷村」を範囲とする。
- (3) 各統計表の数字とすでに刊行した統計数字が相違する箇所は本書の編集の時訂正したものである。
- (4) 調査の時期については原則として上部右端に注記してあるが、表則の「年次」とあるのは暦年（1月～12月）を、「年度」とあるのは会計年度（4月～翌3月）を示している。
- (5) 数字の単位未満は四捨五入することを原則とし、そのため合計の数字と内訳の計が一致しない場合もある。
- (6) 統計中、符号の用法は、次のとおりである。

「0」	……………	単位未満
「—」	……………	該当数字なし
「…」	……………	資料なし、または不詳不明
「x」	……………	公表をさし控えたもの
「△」	……………	減少

統計からみた村民の暮らし

(令和4年)

人 口 (42,041 人) 1世帯あたり2.4人	人口密度 1 km ² あたり1,192人	出 生 1日に1.0人	死 亡 1日に1.2人
転 入 1月に179人	転 出 1月に154人	結 婚 1月に18組 窓口受付数 <small>(国外を除く)</small>	離 婚 1月に8組 窓口受付数
村議会議員 (19名) 村民2,213人に1人	村職員 (275名) 村民139人に1人	ゴミの排出量 1人1日に1.0kg	水 道 1人1日 平均使用水量332L
交通事故 3日に1件	救急出動 1日に6.5件	火 災 52日に1件	村税負担金 1人あたり 114,058円
村の予算 1人あたり508,946円			